
恋する僕（ぼく）と漫画狂

椋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋する僕と漫画狂^{ほく}

【Nコード】

N1811X

【作者名】

椋

【あらすじ】

魂異世界製の優男が、運命の相手に会わせることを条件にパラレルワールドへ！

しかし辿り着いて見れば、自分は女の子になっていて!?

そこは隣の家に行くだけで何時間もかかる日本の田舎の中のド田舎で……出会った運命の相手も可愛いけれど……!!

おわりとはじまり（前書き）

もしかしたら短編になるかも……なので軽く楽しんで行って下さい。

おわりとはじまり

……あ、ここは……

ここは、狭間

は、ざま？

そう、ここは全ての物語の狭間であり……定められた新天地へ旅立つ者に与えられた準備の為の空間

しんでんち？ものがたり？

君も一度くらい疑問に思ったことがあるはずだ。

君のいた世界に数多ある書籍の中には、その内容に酔狂し、一度で良いからこのような体験がしてみたいと思う物語が数多あり、中には実際に物語内に侵入することは出来なくてもせめて……と個人の空想を交えた内容の書籍を作り上げる者も君の世界には存在していたと聞く……。

それほど多くの物語が存在し、それほど多くの人間が目を通していたのなら……逆はどうかね？

君のいた世界を、外から見て、読んでいるものはいないのか？

しょうせつや、まんがのことをいつているのですか？

全てを

す、べて……。

そう、全てだ

そのしょせきのなか、すべてのとうじょうじんぶつが、じつはな
かからばくらをみていると？

仮定の話だがね

だとしたら、ぼくのいるせかいにも、そのひとたちのこのむきや
らくたーがそんざいしているのでしょうか？

それも、また仮定の話だ。

……それで、ぼくはなぜここに？

なぜ、それは難しい質問だが……。しいて言えば、君は君のいた
世界から切り離され、新しい地へと旅立つためにここに存在している

きりはなされ……

君に拒否権はない、そして、時間も残り少ない。

さて、望みを聞こう

のぞみ……？かえりたい、あのせかいへ

それは出来ない、先に言っただろっ？拒否権はないと。さあ、望みを聞こう

どんなのぞみでも？

一つだけ、だがね

ひとつでじゅうぶんです。……あたらしいせかいにも、きっとせかいじゅうさがせばひとりはあるでしょうから……だからどうかほくがあいし、あいされるあいてにあわせてください

逢わせるだけでだけで良いのか？人の心は移ろうもの、相手を感じさせることも……

いいんです。そのかたがしんじつぼくのこいするあいてであり、いきているあいだにであうことがなつたなら、どんなかたでもしようにいけばなすことはないのですから

随分な自信だな？まあ良い。そのように手配しておっじ。

……このようなたいけんをするのはふほんいなので、おれいをいうのはやめておきます。

そして僕は、新しい世界に生まれ落ちた。

自分のいた世界で称される、パラレルワールドの住人として……。

この世界を、前に生きていた世界とは異なる世界だと気付いたのはある出版社の名前を目にしたことが始まりだった。

週刊少年ジャック……はい？なんですか？

この世に生まれ落ちて早くも15年が経過し、新しい両親にも、こののかな田舎の環境にも慣れ、恋人も出来たというのに……

「あの、エイジ君？この……ジャックと言うのは？」

「はいい？あー！！それ見ちゃったデスカ！？」

あ、そう言えば僕……生まれ変わったら女の子になってました。

まあ、最初は驚きましたが……僕自身なことに変わりはないですし、生活に支障もないので口調もこのままです。

「はい、見ちゃいました……駄目でしたか？」

何時も道理、彼の部屋に静かに侵入し、黙って漫画を読んでました。

しかし、いつもはこの和室のどこを見ても足の踏み場もないほど散らかっているというのに、部屋の唯一の入り口である襖の横30センチほどが何と片づけられ、あの出版社の名が刻まれた封筒がそっと置かれていたんです。

「むう、恥ずかしいので内緒にしておこうと思ってたデスが……まあいいです」

「恥ずかしい……ですか？」

「ソーデス！準入選デスから」

はぁ……彼は、少し変わった方なもので。

「……準入選、と仰いましたか」

それにしても、まさか……冗談だったのですが

「ハイー！！言われた通りジャックに送りました！……ギューン
！ガガガッ！」

随分前のお話ですが、漫画ばかり描き、年中部屋に引きこもり気味な彼へ僕は言いました。

こんなに書き上げた原稿があるのだから、一度出版社へ郵送して批評していただければ宜しいのでは？と。ですが、送って早々……準入選ですか？

「……準入選とは、いつ連絡が？」

そう、僕がいつもよりほんの少し低い声で彼の背中に問いかける。彼は大抵、自室にある机に向かい漫画を描いていて、誰が声をかけようと気付きもしない。それが、ご両親であっても羽虫であっても僕であるうと関係ないのだ。

「ギャースギャース！！ゴゴゴゴッ！！」

「……。」

「ギャーギャーグオー」

「……………」

「ドドドドドドツッ！！」

彼を初めて見たのは、中学の入学式でした。

あの頃は……そういえば、あの頃から彼は彼でしたね。元々が個性の強すぎる彼ですから、はっきり言えば同級生から忌避されるのも予想できたことでした。……本人はそのようなことを、ほんの少しも気にしてはいませんでした。

まあそれは、精神年齢が同級生と大幅にズレのある僕も同じですが。

そのことを踏まえてみれば、僕たちは出会おうべくして出会ったと言えます。

彼は学校へは登校しなくなり、僕は孤立しながらも一人学校へ通っていました。

そしてあの日、僕は下校時に担任の先生に呼び止められ、溜まった彼への課題や書類を届けるよう頼まれ……初めて彼の家へと向かい、そして出会ったのです。

所謂、魂の片割れ、運命の相手と呼ばれる人に……。

「ドツビューー！！ガゴンガゴン」

「……エイジ君、僕のお話聞いていましたか？」

僕は先ほどよりも低い声で問いかけます。

「むー、キツキは怒ってるデスカ……？」

くるり、と椅子を回し、僕を見たエイジ君の顔は酷いものです……
…普段は奇声を発していても笑顔だというのに、眉は必要以上に下がり気味ですし、何より唇はタコのように突き出ています。

「……はい。でも、それは僕に郵送の件をお話しして下さいませんか
ったことが原因ではありません。先ほどから聞こえているにも拘らず、エイジ君が僕を無視していたことに怒っています」

「……ゴメンナサイデス。キツキが怒るからデス……」

はぁ……。

「エイジ君、準入選はとても素晴らしい出来事です。ですから、
宜しければ漫画を描くことを一休みしてお祝いをしませんか？」

「お祝い……デスカ？」

「はい。実は僕、自宅で焼き菓子を作ってきたので良ければ」

「むうあー！！焼き菓子ですか！？どこですか何のお菓子ですか
???!」

またまたおかしな奇声をあげて、自分の足の踏み場もない室内を見渡している彼……

「お菓子なら、お母様にお渡ししておきました。ですから」

「うおー！！やったデスー！！」

「……ですから、下に降りてお父様やお母様と一緒にお茶にしませんか？」

まったく、物事一つ伝えるだけだと言うのに……

「ハイハイー！！食べるデスー！！行きましょー！！びゅーん！」

元気よく返事をした思ったら……置いて行かれました。

「……。まあ良いです」

それだけ喜んでいただけなら、作った甲斐があるというものです。

「こらエイジ、菊月きつきちゃんはどつしたの？」

「びゅー……ん？キツキは部屋にいるデスカ？」

とんとんとん、と階段を軽く早足で降りて行くと……はあ、とお母様の呆れたような軽いため息が聞えてきました。

「あら！菊月ちゃん、ごめんなさいねえ」

「いえ、慣れていきますので」

困ったようにほほ笑むお母様に、僕はそう返しながらエイジ君を見れば

「うおーお！！凄いデス！！」

もう僕が持ってきた焼き菓子の袋を開け、キラキラした瞳で一心にそれらを見つめているのが目に入り

「ふっ、ふふっ」

彼は何時だつて一度に二つの事が出来ない人で、漫画なら漫画、お菓子ならお菓子に一直線……。

なんだが、妬いてしまいそうなくらい……けれどそれほどまでに純粹なのだと思うと微笑ましくも思えて

「菊月ちゃん、本当にあの子で良いの？菊月ちゃんならもつと素敵な人が他にもいると思うのだけれど……」

「ふふっ……いいえ、僕はエイジ君が良いのです。他の人なんて、

じゃが芋か南瓜くらいにしか見えません」

「そーお？まあ、私たちとしては嬉しいけど」

今は可愛いエイジ君も、漫画を描いているときは真面目で凛々しい男の子ですし、僕にとっては世界一より素敵な方です。

「むうー！！キツキもお母さんも早く来るデス！！」

……茶の間でちゃぶ台をバンバンと叩きながら、僕とお母様を呼ぶ彼は最高に可愛いです。

「はいはい。さあ、菊月ちゃん座って頂戴。おとうさん！お茶にしましょう！」

お母様はお茶を入れに台所へ、僕は大人しくエイジ君の隣に座りお父様とお母様を待ちます。

「まだデスカ！？もう食べたいデス！！」

タコのように突き出した彼の唇に、僕はお菓子袋の中から小さめのクッキーを取り出してむにと押し付け

「エイジ君、休憩時間はのんびりするものです。急かしてはいけませんよ？」

「もぐもぐっうおー！！おいしいーデス！！」

……聞いているのでしょうか？

僕の指ごとクッキーを食べてにこにこことご機嫌な様子ですが……

「僕の指はお菓子ではありません、食べないでください」

「もっと下サイー!!」

はあ……

「まあ……、エイジ！菊月ちゃんの指!!」

「あ、齧られてはいませんので大丈夫です。お父様は……」

「おや、これはまた美味しそうなお菓子だねえ」

お母様もお父様も、土地柄でしょうか？穏やかな優しい方々です。エイジ君が愛されているのも、この空気で伝わってくるのです。

「お父様、お久しぶりです。お元気そうで何よりです」

「いやいや、菊月ちゃんも元気そうだねえ」

ここは青森、そしてとても緑深い地ですので、なんと言いますか……家と家の距離が遠すぎまして、あまり頻繁には遊びに来れないのです。

なので僕としては、早めに運転免許を取ろうと計画中です。

「さ、お茶も入ったしエイジも待ちきれないようだから食べまし
「よ」

「やっとデスー!!」

お母様の言葉を合図に、おのおのがお茶を啜り、お菓子を食べ、お話を始めました。

「いやあ、しかしこうしてのんびりとお茶を飲むのも良いものだね」

お父様がしんみりと仰いました。

「そうねえ、菊月ちゃんが来る前は御飯よって呼んでも中々返事もしない子で……一緒にお茶を飲めるなんてねえ？」

「むふうー！！おーいしーデス！！！」

お母様もお父様もなんだか嬉しそうです。

「エイジ君、口にお菓子を付けたまましていると蟻が上がってきますよ？」

「ノー！！！！デス！！！」

いくら言っても綺麗に食べないエイジ君には脅しも必要、と思ったのですが……山奥に住んでいる僕等には冗談のレベルではなかったので、かなり驚いて着ていた服の袖で口元を必要以上に擦っていました。

「……あまり擦ると痛くなりますよ？それに服の袖で口を拭くのはやめてください」

「……キツキは意地悪です。ぶふうぶふう！！！」

「まったく」

そんなやり取りも、お父様やお母様にとって見れば微笑ましいのか、ニコニコしながらこちらを眺めていらっしやっただので少し恥ずかしくなり、僕も大人しくお茶を啜ることにしました。

休憩も終わり、夕方。

「エイジ君、僕はもうそろそろお家へ帰ります」

「ドツビューン！！ドドドドドオ！！グオーガガッ！！」

「エイジく」

ピロリロピロリロ

「ハイハイー！！ドゴドゴドゴッ！！ビューー」

僕はまた、彼が自室で漫画を書くのを横目で見ながら過ごしていたのですが……差し込む日差しが紅く染まり始めたのに気づき、家も遠いこともあり早めに帰ろうとエイジ君に声をかけたのですが……

「ドドドドドッピューン!!」

彼の携帯が鳴り、珍しくすぐに電話に出たと思えば……奇声を上げ続けるのだから困ったものです。

「エイジ君、静かになさらないと相手の方がきつと困ってしまいますよ?」

「ギューン!!ギョルギョル!!ドドドドドッ!!」

注意しても聞えていないのが無視なのか……まったく、思ったら急に携帯をこちらに差し出すエイジ君に驚き

「どうしたのですか?」

「ギヤースギヤース!!」

「もう……。あの、もしも?どなたでしょう」

反応がないので、仕方がないですねエ。と呟いて携帯を受け取り電話口に出ると

「えっ?だ、だれ?じゃなくて……えーと新妻君のご家族の方ですか?」

となんだか年上の、けれど自分の父よりは確実に年下だろうと思われる男性の声で問われた。

「……エイジ君?どなたなんですか?」

「ギヤース！！ダダダダッダバツ！！」

「はあ、頭が痛くなってきました。……ええと、僕は新妻エイジの恋人で菊月きつきと申します。失礼ですが、そちらはどなたでしょうか？」

彼の事はとても言葉では言い表せられないほど、好きですが……
こういう時はほんの少し正座させて説教を試みたくありません。
まったく、と何時ものように呟きながら自分のこめかみを強めに揉みながらこちらからも問いかけました。

「へっ！？ここここ！恋人！？えー？！」

混乱している模様です

「あの……」

「あつ、すいません。俺、服部雄二郎と言います！えーと、東京にある遊栄社つて言う出版社の週刊少年ジャックで働いていて、新妻君とは上京と連載の件で電話をしたんだけど。それで……親御さんに繋いでほしいんだけど、全然聞いてもらえなくて……」

上京……？

「今、上京と、そう仰いました？」

「え？ああはい」

「……エイジ君、この方はいったい誰の事についてお話しされているのでしょうか？」

「ぎゅ、……キツキ？」

「そうですね、上京ですか」

出版社に郵送していた件もそうですが、彼にとって僕は……

「もしもし、今ご両親とお電話変わりますので」

「えっ、はいお願いします……」

「お母様、東京の出版社の方からエイジ君の事でお電話です」

「東京の？何のようかしら、おとっさーん！良く分からないけど、お電話ですって！」

「ん。東京？はい、もしもし？はあ……」

僕は黙って一階の茶の間に降り、お母様に携帯を渡した後、静かに新妻家をあとに致しました。

二ページ

あの日から数日、携帯を何度見ても、エイジ君からの連絡はない。

自宅の部屋で柔らかなソファに座り、携帯を持って余す、僕。

「……ひとりは、さみしいです」

何時もそうでした。前の世界でも……家族も、友人もいて、愛情は感じるのに、足りない、もっと欲しい、と埋まらない何かを探して……探して

「そうしても、見つからなくて」

誰でも良いわけではなくて、でも誰かに見つけて欲しくて……

「あんな風に、いつも漫画ばかり描いていても……僕の事を忘れてるわけではないと思っていたのに」

上京がいつたい何時なのかは分かりませんが……エイジ君の事です。黙っていたら、ある日急に「明日東京に行きます！」なんて旅行気分言い出すに決まっています。

「そうしたら、僕はどうすれば良いのですか……」

はぁ……とため息を吐きつつ、以前エイジ君と撮った写真を眺めていると

「……菊月、ちょっと良いかい？」

こんこん、と聞いたノックと共に父の穏やかな声が。

「どつぞ」

そう返すと、いつものようにゆっくりと部屋に入り、ドアを閉めると僕の正面にある父専用の座布団に腰掛け、一言。

「エイジ君となにかあったのかな？」

笑うでも怒るでもない、穏やかな表情で僕へ問いかける父。
こんこん、とまたノックが聞こえてくる

「はい、どつぞ」

「私も話に入れて頂戴」

そう言って母まで自分用のピンク色の座布団に座りこむ

「……で、どうなの？エイジ君と何かあったんでしょう」

父とは違い、母はにこにここと僕に問いかける。

「なぜ、そう思うのですか？」

ここ数日、確かに携帯の確認は多かったかもしれませんが、そんなことは家が遠い以上いつもの事です。

「何故だと思っかい」

父はゆったりまた僕へ問いかけます。

「分かりません」

幾ら僕が二度目の人生だとしても、この父に勝てる日は一生来ないと数年前に結論は出ているので早めに降参してしまいました。

「ふふっ、菊月はお父さん相手だと弱いわねえ」

なんて母は笑いますが、父相手では仕方ありません。

「新妻さんから、相談を受けてね」

「相談……ですか」

父はそう切り出すと僕の瞳を見つめてこう言いました。

「何でも、エイジ君は東京に上京することが決まったらしい」

どくり、としんぞうがなみうちます……

「こう言つては悪いが、あの子の事は変わった子だと思っていたよ。菊月が彼を好きだと言ったとき、正直とても心配した。君の事も、彼の事も、お互いに個性が強すぎるくらいだからね。」

「本当よね、どぴゃーとかごおーなんて言ってるような子には、うちの可愛い菊月をあげられませんかなんて思ってたけど。ふふっ、お話ししてみればエイジ君も意外に良い子だし、他に何にも興味を示さなかった貴方が自分からそばに寄って行くんだもの」

「……」

「思えば、付き合い初めに心配過ぎて両家顔合わせした時も、エイジ君は漫画を描いていたし、あなたはそばに座り込んで勝手に漫画を読んで……不思議なカップルよねってあちらのお母様とも話していたのよ」

「まったくだね。親の心子知らずと言ったところかな？」

父も母も勝手なことばかり話し始めて……何をお話しに来たのでしょうか。

「さて、雑談はこのくらいにしておこうかな。……エイジ君の上京の話はしたね、ええと？」

「もう、お父さんたら。言いたくないのは分かるけど、黙っていて勘違いしたままじゃ菊月が可哀想でしょうに」

「ふう、実はだね」

「はい、なんでしょう」

父が背筋を伸ばしたのをみて、僕も佇まいを改めました。

「これは、エイジ君から言い出した話らしいんだけど……」

なおも言いよどむ父に、良くないお話しでしょうか……と思い、
身構えた瞬間

「菊月が良ければ、婚約しないかってあちらのご両親から電話があったの」

……こ

「あなた達、エイジ君の上京の話で喧嘩したんでしょう？前々から思ってたんだけれど、2人を見てみると

もう熟年の夫婦みたいだし。それにね？私達にしてみれば、別れるんじゃないかって言う心配よりも、離れた時の精神の心配の方が強いし。結婚してしまえば早いんだけど……よく考えたらあなた達まだ15歳なのよねえ？」

「お母さん……」

母は強し、とはよく言ったもので……父を押しつけて一人で話し続ける。

「だから！婚約して、エイジ君が18歳になったらさつさと結婚しちやいなさい！エイジ君は東京の出版社のお墨付きで出世街道まっすぐらだし、ね？あちらのご両親が仰るには、婚約指輪はもう購入済らしいわよ！ちゃんとエイジ君の稼いだお金で！」

くらっとしてきました……

「お父さん……その電話は何時？」

「さつきだよ、エイジ君は……彼も男の子だからね。本当はもっと大きな賞を取ってから菊月へ伝えようと思っていたらしい。まったく……こんなに早く君を手放すことになるなんて、神様も随分と意地悪だね」

「どうして、僕がこのお話を承ける方向で話が進んでいるのですか……」

そう、父と母へ、少しふて腐れたような、気恥ずかしいような気持ちで問いかければ

「菊月は昔言っていただろう？エイジ君の隣にいと、安心できると。たったそれだけの事でも、そういう相手をお探すのは本当は凄く難しいし大変なことだと、君は知っているようだからね」

「そうそうそれに！私達としても、家族ぐるみのお付き合いまでしていて、別段浮気の心配もなさそうなエイジ君なら安心だし」

「……でも、一言くらいエイジ君も相談してくれても」

「彼も男の子だからねえ」

なんだか、父も母もしんみりしていて……僕としても結婚するなら相手はエイジ君だと考えてはいましたが、こんなに早くこんな話が持ち上がるとは思ってもいなかったのです

「なんだか、心臓が」

「まあ、ゆっくり落ち着いたら……エイジ君に連絡してあげなさい」

そう告げて、父と母は腰を上げ、僕の部屋を退室しました。

「……婚約、ですか。こんな僕が」

まだ高校一年なのですが……

あれから二時間、僕は携帯を握りしめ……

「はあ……」

握りしめています。

「やはり、会いに行った方が早いような気がしてきました」

何時までもこうしているわけにもいきませんし。

とんとんとん、と階段を下り一階でテレビを見ていた母へ

「エイジ君に会いに行つてきます」

と告げ

「気を付けてね」

そういつものように返事を貰うと、僕は愛用の自転車へ跨り、緑深い田舎道を走り出しました。

「こんにちは、菊月ですが……」

そのまま挨拶を述べようと口を開けば

「まあ！おとーさん！菊月ちゃんが来てくれたわ」

「あ

「いらっしゃい。数日ぶりだね、お話は聞いてくれたかな？」

お母様が叫び、お父様が仏のような穏やかな空気を漂わせて来られた。

「はい、でもあの……お返事はエイジ君とお話してからでも宜しいでしょうか？」

「……ああ、いいとも。なあ？」

「ええ、ゆっくりして行ってね」

これはもう、新妻家でも、僕が頷く方向で話しは纏まっているの
でしょう。

とんとんとん、また僕は階段を上がりエイジ君のお部屋へと足を
進め

「エイジ君、菊月です。入りますよ？」

返事がないのは分かっていたので、僕はそのまま部屋へ足を踏み
入れました。

「ゴオオオツ！！ドドドドオーツギヤース！！」

「……………」

さて、今日は真面目なお話しなので

パンパン！！

と容赦なくエイジ君の耳元で手のひらを叩き名前を呼びました。

「エイジ君！！」

「ギャー！！キツキデス！！」

「……………僕に驚かないでください。と、そうではなくお話があるよ
伺いましたか？」

「うおおおおお！そうデス！これデス！！」

彼は、突然響いた音にも背後にいた僕にも驚き悲鳴をあげ、そのまま奇声を上げつつ引き出しの原稿をかき分けて小さな箱を僕へ差し出しました。

「お父さんとお母さんにも相談したデス！！きっと似合います！！」

「……まったく、エイジ君へムードと呼ばれるものを求めてもきっと無駄と言つものでしょうね」

小箱を受け取り、そつと開けば……

「こんな、高そうな指輪でなくても……」

「漫画の賞金がありません！！今度の手塚賞もきつと入選デス！だから一緒に東京に行きましょー！！」

なにが繋がつてだからになるのですか……きつと意味的には「お金で苦労はさせないデス！！」と言つたところでしょうか？

「……」

僕は指輪を箱ごとエイジ君へ差し返します。

「のおおおおデス！！」

エイジ君は僕がこうして突き返すとは思つてもいなかったらしく、半泣きです。

「違います。指輪……嵌めてください」

エイジ君相手ですから、場所が散らかり放題の自室でも、彼がコレコレのスエットでも妥協はしますが……これくらいの我儘は許されませんでしょうか？

「イエース！！デス！！嵌めマス！！」

子供のように喜んで、小箱から指輪を外すと、僕の手を取り、左手の薬指へゆっくり慎重に嵌めていきます。

「エイジ君、良く指輪を嵌める指を知っていましたね？」

「おかーさんとおとーさんに聞きますタ！……ふうー終わりです！」

「ありがとうございます。……とっても嬉しいです」

僕がにっこりと笑いかければ、エイジ君も頬つぺたをピンク色に染め上げて照れています。

そして、魂は異世界出身の僕、匂坂菊月なにおききくげつと漫画狂の彼、新妻工イジにいづまは、ぽかぽかと暖かい昼間、漫画や原稿が高く積みまれ、見渡す限りインクを乾かすために原稿が敷き詰められた畳の上で、インクと陽に焼けた紙の匂いを嗅ぎながら、そつと……ちゅうをしました。

「これで、キツキも一緒にとーきょーに行くデス！！一人は怖いので安心デス！！」

「……」

もしかして、東京行が一人では怖いから僕を道ずれに……？

「……エイジ君、そのためにこの指輪を購入したのではないでしょうね？」

エイジ君は、明らかに体を跳ねさせましたが

「ギャーギャー！！そんなことナイデース！！ギャース！！」

「……そうですか、なら東京へは一人でどうぞ。僕はせっかく進学したばかりで高校を変えろというの少し心残りがあつたもので、エイジ君がそう仰つて下さつて良かったです」

「ギャ……。ノオオオオオオデス！！一緒に行くつてさっき言つたデス！！嘘はダメデス！」

「先ほどの、婚約しようと言つて意味で指輪は受け取りましたが……。だいたい、。上京するにしても、出版社側との契約などはまだなのでしょう？ならその話もまた今度、です」

「むふううー！！分かつたデス！！その時またハナシマシヨー！！」

まったく、婚約の話もこれでは真意は怪しいモノです。今まで家に籠りきりだつたのですから、都会が怖いのも、仕方がないと言えばそうなのでしょう……。

やはり子供の頃から両親や先生、それに近所のお年寄りの方々に何かにつけ都会は怖い所だ、余所者を見かけたら大人へ報告、など

と子供達の恐怖を煽るような言葉を聞いて育ったせいでしょうか？

「それでは、僕はこれで帰ります。エイジ君、たまにはお部屋の掃除、してくださいね」

「駄目でーすー！帰らないでクダサイー！」

僕は話は終わったので帰ろうと出入り口の襖の方を向くと、びよん、とジャンプしたエイジ君がとおせんぼ

「そろそろ帰らないと、お昼ご飯も食べてないですし……もう一時です」

「僕もまだデースー！おカーさんが作ってくれマス！」

「そんな……指輪を受け取ったばかりで失礼なことは出来ません」

「むむうー！シツレイじゃないですー！行きましょー！！」

「あつー！エイジくんっ」

……婚約者になったばかりなのに、なぜ僕は、にこにこしたお父様やお母様の向かいに座り、エイジ君の隣でうどんを啜っているのでしょうか？

「……あの、お父様お母様」

意を決して、改めてご挨拶を と思ったのですが

「ぶふっ」

「なんだ母さん、急に笑ったりして……」

「だって、やーっと菊月ちゃんがエイジのお嫁さんに来てくれて」

「嫁さんかあ、しかし気が早いな」

のほほん　と喜んでくださるのは嬉しいのですが……僕は婚約者であって妻ではないのです。

「エイジ、良かったなあー？」

そんなことを考えている間にも、お父様はエイジ君にほほ笑みかけ

「ズツキキューン！！デス！！」

エイジ君はこの輪の中でだけ通じる返答を返すのです。

「御日出度いついでに、今日は出版社の方たちも来られるから、菊月ちゃんがいてくれれば心強いわあ」

「そっちなあ」

「シユピーン、デスー！！」

「きよ、今日ですか……」

三ページ目(前書き)

三ページ

エイジ君のお父様やお母様に祝福された昼食から三時間が経過しました。

「エイジ君、あの……出版社の方は何時頃？」

「ん、わからあんです！！シュツピン！！」

こうして自分の家にも帰らずに、彼の部屋で食後の休息を過ごしているのも、その方たちの為だと言つのに……。

「でも、もし到着が遅ければ僕の帰りも遅くなりますし……」

そう告げた瞬間の、エイジ君の表情を僕は生涯忘れないでしょう。

「そーしたら！！きょーは一緒に寝れるデス！！」

……いえ、僕も元男ですので、お気持ちは理解できます。

好きな方、しかも婚約者の女性が同室にいて帰りの相談をしているとなれば、まあ、分からなくもありませんが……。

「……エイジ君、僕も貴女の事は愛していますのでお気持ちは理解しているつもりです。そして僕も同じように、いづれはと思っもいますが、そのお顔は……どうにかありませんでしょうか？」

僕を取り巻く空気は現在、吹雪いて尚且つ凍り付いております。

「ギャース！！ゴゴゴゴメンナサーイデス！！お母さんにお願

いしマスー!!」

頬を桃色へ染め上げ、鼻の下を伸ばしていたエイジ君は、僕の顔を見た瞬間……顔色を青白くさせて雄叫びを上げながら部屋から逃げ出そうとしましたが!そうは行きません。

「エイジ君?どこへ行くのですか?ここに正座、です」

やはり夫婦とは最初が肝心だと亡くなった祖母も常々言っておられましたことですし、こういったお話しは早いほうが良いでしょう。

「はいデス……」

「お返事は短く元気に、お願いします」

「ハイ、デスー!!」

いつもの奇声、シュピーーン!!が聞こえてきそうな拳手と共に元気なお返事を頂いたところで……

「ごっほん。……宜よろしいですか?」

長々と、ですか要点をまとめ、しっかり僕からのお願い事を伝えさせていただきました。

……あの話合い終了からそれほどの時間を置かず、それは始まりました。

一階からお父様やお母様、そして知らない男性の声が聞こえて来たのは十分ほど前でしょうか？

しばらくお話していたようでしたが、気が付けば足音が近づいてきます。

「エイジ君？誰か、多分出版社の方が来られたようですよ？」

彼は、お話合いの時間終了と共にご自分の世界に引きこもってしまい奇声を上げ続けています。……そんな難しいお話はしていないと思うのですが、まあ多少厳しいのはこれからの為を想えばこそ！なので許していただきましょう。

「ドドドドドドツッ！！シューーン！！」

その時、かたつ、と廊下を踏む音の後にすうーと襖が開きました。

「エイジ、少年ジャックの方たちがお見えになったわよお？」

そう、入り口からお顔を出されたお母様がいつもの調子で優しくエイジ君に声をかけます。

「ズッキューン！！ズシューー！！ブツシャアー！！」

……エイジ君は、顔さえ上げずに完全無視です。

お母様の後ろには、アフロのお兄さんと口髭を生やしたおじ様が……。

「……………」

この世界の社会人はアフロや口髭でも許されるのでしょうか？

「ドオ、バババババツ」

そんなことを考えている間にも、がさつとアフロのお兄さんが足を一步前へ踏み出し

「新妻君、編集長のささきっ」

モゴモゴと何かを言いかけたところへ、彼の上げた大声が

「ギャオンン！！グオオオ」

うつ　と奇声に怯み、自然に半歩下がるアフロお兄さんの足を、僕は見ました。

これは、アフロお兄さんは完全にエイジ君ワールドへのみ込まれたようです。

「に、にいつま君……………」

アフロさんの声にはもう気力を感じられません。

「……はあ」

僕は思わず部屋の隅からアフロさんを見つめ、色々と今後を想像しては心配になり、重いため息を吐いてしまっていたようです。

正直、本当に高校の卒業までは青森から出るような事は考えてもいませんでした。誰にどんな説得をされても、首を縦に振るつもりも、これからはお仕事に分類されるであろう漫画の執筆についても一切関わるつもりがなかったのです。

しかし、この方がエイジ君の担当さんならば、多少の助力は仕方がないのかもしれないと思い始めていました。

まあ、主に2人の意思の疎通、コミュニケーションの部分については……。

そんなことを考え一人頭を痛めていると突然、今まで静かでした口髭のおじ様が儼かな声音で

「凄い部屋だね」

と仰いました。

エイジ君に初めて会って驚いたり、引いたりしない方はとても珍しいのです。

「……」

僕はずうっとお部屋の隅で、読みかけの漫画の本を片手に全員の様子を傍観しておりましたが、思わず……こんなことは失礼だと思いましたが、口髭のおじ様をしげしげと頭の前から足の先まで眺めてしまいました。

「アッ！」

いつもの如く、エイジ君は振り向きもしないまま唐突に声を上げました。

「上京するにあたって、僕から一つ条件があるんですけど」

ほう、このように彼が普通にお話するのは本当に珍しいのでも貴重な体験です。

ですが、条件とは………いったいどのようなモノなのでしょう？

見た限り、この場で動揺を顔に出しているのはアフロさんだけ……

……。口髭のおじ様は落ち着いたものです。

「………条件？」

………さすがに声音は少し訝しそうですが。

「もし僕がジャックで一番人気の作家になったら………」

皆さんが静かに耳を傾ける中、そう口火を切ったエイジ君は椅子をまたぎ身体を回転させたかと思えば、不敵な笑みを浮かべ

「僕が嫌いな漫画を一つ終わらせる権限を下さい」

などと、大人たちへ万年筆のような先が尖った執筆用のペンを向け仰いました。

「ええ!!!？」

僕にすれば、こういったエイジ君の突拍子のない行動や言動はいつもの事なので落ち着いたものです。

今はそれよりも、現在進行形で先の尖ったものを生き物に向けていることについて後で注意をしなければ、と脳内にあるエイジ君用のメモ帳へ書き込んでおきました。

ですが、さすがにアフロさんは驚いたようで思わず声を上げられたようでした。

「……」

僕はとにかくアフロさんは視界から外し、口髭のおじ様がどのような反応を返すのかをじっと待ちます。

「ギャア！ゴオオオ」

エイジ君自身は、固まる大人たちを物ともせず、話は終わったとばかりに身体の向きを机へ戻し原稿の執筆へ意識も切り替え、もう奇声を上げています。

「なあーに言ってるんだ新妻君！！そんなの駄目に決まってるじゃないか！冗談キツイなあゝははっはははっ」

……無理をして明るい声を上げているのは丸分かりと言うものです。視界から外したはずのアフロさんは今もなお、無理にカラ笑いを続け、ますますこのお部屋の空気を重くしているのですが……気づいておいででしょうか？

「シュピーン！！……それをモチベーションにやりたいんですけど」

そこへこの空気を作り上げ、尚且つ放置していたエイジ君の一言。

「一番人気の作家、その志は素晴らしい。プロの厳しさを身をもつて知り、ジャックの真の看板に上り詰めたくて、まだ君がそう思っていたならその時もう一度聞こう」

そこへ冷静に言葉を返す口髭のおじ様。

「……そうですか。わかりました東京に行きます」

またそこへ、彼の静かなお返事が……。

なんと言いますか、お二人の世界に入られているようで苛いらつとして参りました。

「エイジ君？僕もこの部屋に存在しているということをお忘れでは？」

つい、静かにしていようと思っていたのですが……これが所謂嫉妬いわずなのでしょうか？

僕が声をかけた後、アフロさんや口髭のおじ様はともかくとしてもエイジ君まで……ばっ と音が聞こえてきそうなほど、驚いた彼らがこちらを向く動きはとても俊敏でした。

そしてその反応にも苛いら々したまま、

「……忘れていたのですね」

部屋の隅に正座をしたままの僕が、彼の瞳に映った瞬間……

「ゴゴゴゴゴゴッ！！！ゴメンナサイデ ス！！！！うっかりしてたデス！」

怯えたように飛び上がったエイジ君は、鼓膜が破れたかもしれない……と思わず感じてしまうほどの大声をご近所の森林へ響かせながら、目にもとまらぬ速さで移動して来てズサツと向かいへ座り込むとぺこりと頭を下げ、僕へ謝罪を申し入れてきました。

「……いつもいつも、そう簡単に謝罪を受け入れるほど僕はお優しくはありません」

どうしてでしょう？いつもなら、エイジ君の可愛さについて謝罪を受け入れてしまうのに……。

やはり、この場に僕とエイジ君以外の他人が存在していることで素直になれないのかもしれませんが。普段はわざわざ探したとしても嫉妬する相手も見つかりませんし、まあ初めての嫉妬対象が口髭のおじ様なのは気に入りませんが、年月が経てば笑い話にでも出来るでしょう。

「むう、じゃーどうすれば許してくれますかぁ？」

唇をタコのように突き出して悩みながら、頭を下げつつ上目使いに僕の機嫌を窺うエイジ君。

「……わかりません。僕、お母様に今日はもう遅いので泊めて下さいとお願いして来ます」

僕は、彼を横目に立ち上がり、アフロさんと口髭のおじ様を完全に視界から締め出し、さかさか早足で出入口口まで進んだところで何やらおかしいことに気が付きました。先ほどから、足は動かして

いるのに景色が一向に変わりません。

「……………」

僕は振り返りません。振り返りさえすれば原因が判明するとしても、それだけはっ

「あの……………君は誰？それに、新妻君は何がしたいの？」

無言の攻防戦に我慢できなくなったのか口をだす、アフロさん。

……………見ていて分からないのですか？

はあ……………。ここで部屋を出なければ、エイジ君に弱い僕はすぐに彼を許してしまいそうで……………本音を明かせば許しても良いのです。正直怒るような出来事でもないですし、ですが僕も初めての感情をもう少し感じていたいの、ここで折れるわけには……………そう思ってもきつと腰にぶら下がる重石おもいがそれを許さないのでしょうかね。

ああ、エイジ君のお母様は皆さんが気が付かないうちに一階へ降りられたようですし、この時分じぶんでは多分もう我が家へ外泊おとほについては連絡済でしょうか？

などと廊下にある窓から夕暮れを眺め、現実逃避おとほを行ったところで何も変わりはありませんが、なんだか疲れたので……………もうすこしだけ。

四ページ？（前書き）

！
何となく、一話を半分に分けてみましたが……意味はないです！

四ページ？

「それで？君はいつたい……」

コントのような一幕を終え、僕も心を十分に落ち着けた頃。

一通りの成り行きを、アフロさんのように遮ったりはせず、ただ黙って全てが終了するのを待っていらっしやった髭のおじ様が口を開き問われました。

「僕は……」

僕たち四人は、エイジ君のお父様お母様を含めた六人で一階の今にて膝をつき合わせております。

そして、髭のおじ様の問いにどう答えて良いものなのか……。エイジ君のお父様もお母様もにこのことほほ笑まれている助け舟は期待できませんし、頼みの綱の婚約者様はどちらかと言うと問題を起こしそうです……。

「ドツギヤーン！！キツキは僕の奥さんデース！！」

……。

「エエーッ！ー!？」

アフロさん……いい加減学んでください。

そしてエイジ君、

「貴方も、いい加減にして下さい?」

「いひやいれす……ろめんなひやいれすう」

おほほほっついつい手が……自然とエイジ君の両頬を抓ってしまいました。アフロさんは目の玉が飛び出でそうなほど驚いて仰け反っていらっしやるし、髭のおじ様は……

「……こほん。それで？本当は？」

髭のおじ様が小さく咳払いをして、せっかく場の空気を変えてくださいましたので……

「ええと、僕の名は菊月きつきと申します。この家にいるのは、その……彼の、新妻エイジ君の婚約者と言っ立場からです。と言っても、婚約者になったのは今日なのです」

……再び、この場を沈黙が包み込みました。

「ほほほほほっ、本当に????！またエイジ君の冗談とかじゃなくて?!」

「……あの、少し落ち着きましょう。今お茶を入れます」

髭のおじ様はきつと会社でも立場は上の方でしょうし、そんな方がわざわざ足を運んで来られたと言うことは難しいお話を、ご両親と交わされることも目的でしょうから、あまり僕の事で時間を取るわけにも行けません。

「僕はココアでお願いしマース!!!ズッキューン!!!」

丁度お昼にお母様が、コーヒーの粉を切らしていると話しておられたのを思い出し、全員温かい緑茶で宜しいですか？とお聞きする前にお行儀よくシュピーンと真っ直ぐに拳手して注文を付けるエイジ君。

「何を言っておられるのですか？エイジ君も、運ぶのを手伝うのですよ？」

子供は席を外した方が良い時もあります。必要になれば声をかけられるでしょうし、お湯も沸かさなくてはいけませんから、暫くはキッチンでのんびりしましょうか……。

四ページ？（後書き）

誤字脱字以外にも、感想や一言お待ちしています。

四ページ？

「エイジ君、お湯が沸きました。皆さんの湯呑と、エイジ君のマグカップは用意して下さいましたか？」

ここ新妻家では、愛妻家のお父様の手により、キッチンでもちよつとした休憩が取れるようにとの配慮からミニテーブルとイスが完備されており、戸棚には僕とお母様がたまに開催する小さなお茶会用の高めのお菓子がしまわれていたりします。

「ハイー！！出来てるデス！！ハヤク！ハヤク！デス！！」

いつもはお母様が座られている椅子に座り、テーブルをドンドン叩き僕を急かすエイジ君。はぁ、と小さなため息を吐きつつ、テーブルを叩いてはいけませんよ？と叱るのでもなく、そんな姿も可愛いと思ってしまう僕は駄目な婚約者です。

そうして、少し反省しながらテーブルの上を見てみれば、頼んだ通り人数分の湯呑はきちんと並べて置かれていて。その隣には……

「これは……」

……新妻家に、僕専用のマグカップが置かれるようになったのは何時からでしたでしょう。いつの間にか、お母様が真っ白のマグカップを買って来て下さって……

「マジックで描いたデス！！コンヤクキネンデス！！」

そのつるりと表面は雪のような白さで、何の絵柄もないシンプル

なマグカップは、僕のお気に入りでした。

真っ白で、つやつやして、触るとひんやり冷たくて、僕の手には少し大きいけれど、それでも、この新妻家に自分の空間が出来たよ
うな、そんな気がして……。

このマグカップをお母様から頂いた時は……とつても、とつても、
嬉しかったのを覚えています。

「……エイジ君」

その僕のお気に入り入りのマグカップは、あのつるりとした雪のよう
な表面をマジックでお化粧され、僕の大好きなエイジ君の、大好き
な漫画のキャラクターの顔が描かれていました。

「嬉しくないデスカア……？」

そう言って、エイジ君は俯いた僕の顔を覗き込みます。

「いいえ、いいえ、そうではありません」

違います、嬉しくないのではなくて……。とても、とても、と
つても嬉しいのです。

「ありがとうございます、エイジ君」

確かに、あの雪のように白く、つるりとした可愛らしさは消えて
しまいました。僕のお気に入り入りのマグカップは、今エイジ君の魔
法のような手によって、今までよりもっと大切に、素敵なマグカッ
プに生まれ変わったのですから……。

「……エイジ君、やっぱりこのマグカップはしまっておきましょう

う?」

僕はなんだか幸せすぎたのぼせたような、そんな気分なので……

「むうー何でデスカ?」

唇をタコのように突き出して不満を露わにするエイジ君へ、僕は思い切って自分からちゅうをしました。

「一番大切な宝物は、2人だけの秘密です」

世界で一番大切な人がくれた、世界に一つだけの大切なマグカップ。

僕たちの恋はお互いの両親に筒抜けの安心安全な恋愛ですが、一つくらい、内緒の秘密があっても許されるでしょう?

そう囁くと、エイジ君の頬はまあるく薄紅色に染まり、彼の瞳に映る僕の顔は、蕩けるように幸せな、そんな顔をしていました。

閑話（前書き）

あまり意味はなく、ただ雄二郎さんを出したかっただけでございます。

なので、物凄く短いお話です。

閑話

*****sideとある編集者^{アフロ}

「……………」

俺は正に今！！自分とはこれから先、長い長い付き合いになる事を願っては止まないマイペース過ぎる奇人少年、新妻エイジ君の物凄くあな青春のページと言うものを目撃してしまった。

「……………（だれだ？！今時の若者は物凄く進んでるって言った奴？！物凄くあなじゃないか！）」

確かにあの歳で婚約者かよ？！とは思ったけど、キスくらいであんな幼稚園児みたいな反応する今時の中学生なんて……………噂に聞く東京の若者の反応とは大違いだあ！！ていうかこっちが恥ずかしいし！！

「……………（うわあ、2人ともほっぺがピンク色だ……………田舎の子って皆純情なのかな？）」

少しトイレを借りようと部屋を出たはずが、通りがかりにキッチンの中が見えてしまい、気になるあまり壁に張り付いて聞き耳を立て、聞こえ見える光景に恥ずかしがる成人男性がここに一人。

「……っ（はっ、これっでもしかして犯罪！？俺は変態じゃないぞっ！）」

きよろきよろと周りを見るアフロさん、誰もいないのを確認して、そそくさと張り付いていた壁から離れ、安堵の息を吐いた。

「……はあ、（うん。それにしてもあの様子じゃ、婚約者のあの……菊月ちゃんも東京へ来るのかな？と言っより来てほしいなあ、新妻君と上手く対話している人初めて見たし。大体新妻君、優しそっうなあのお前にも奇声で返事してたな）」

はあ、やっぱりあの菊月ちゃんが頼りか……。

五ページ

あの気恥ずかしい一幕から数分後、やかんのお湯も丁度良いタイミングで沸きましたので大人用のお茶とエイジ君用のココアを入れ、お茶づけに僕とお母様用のお茶会用の少し高めのお菓子を用意してトレーに乗せると、キッチンを後にしました。

……僕の方はどうするのか、と申しますと、実はエイジ君がココアを分けて下さると言って下さったので一つのカップで仲良く一緒に飲むことにしたんです。

「……皆様、お待たせいたしました。どうぞ」

「……」

僕がお茶を配り、声をかけると……？何やらアフロさんからあまりよろしくない視線を感じます。

「……エイジ君、ココアここに置きますよ？」

とりあえず、気が付かなかったことにして視線を逸らし、エイジ君の隣に正座しながらテーブルへココアを置きます。

「……」

「こほんっ、エイジ君の上京についてのお話は終わられたのですか？」

エイジ君は自分の事だと言うのに、嬉々としてココアを飲み全く

の他人顔をしています。お父様やお母様はにこにこことほほ笑みながらこちらを向くと

「そうだね、大体は済んだかな？ただ、キツキちゃんの事でね」

「そうなの、キツキちゃん……エイジについて行ってもらえないかしら？」

……思わず、隣でココアを飲む婚約者の顔を見てしまいます。うつ、そのキラキラした瞳を見てしまいますと……そうですね、彼の仕業ではないと信じることにします。

「……」

はっ、まさかアフロさん！！

「……あふるさん、貴方ですか」

僕の首が、驚くほど迅速に目的の方向へまわると、そこにいたアフロさんはそろっと目を逸らされました。

おっと、動揺しすぎてアフロさん呼びを口に出してしまいましたね……まあ、誰も気にしていないようなのでよし！です。

「元々キツキちゃんにはお願いしようと思っていたんだけど、いつ言おうか迷ってたのよ。そうしたら、ちょうど良くこの服部さんにキツキちゃんは東京へ行かないんですかって聞かれたものだからねえ？」

ねえ、とお母様に優しく聞かれましても。僕は元々、高校を卒業するまでこの青森から出るつもりなどないので……。

「ハイハイー！！キツキも一緒にフガッ！！」

エイジ君はお行儀よく手を上げ発言権を求められましたが、僕が許可を出す前に話を始められたので彼の伸びたままの腕を引っ張り

……

「エイジ君……これは僕の人生において、とっても大切なお話になるので少しお静かに」

またしても自分を押し流そうとするこの場の空気を読み、僕はまず一番の問題児である婚約者の口を塞ぎます。

そして周囲の大人の顔を見て、僕はしっかり意見を伝えました。

「僕は、折角縁あつて入学した高校を途中で放り出す気はありません。何より、卒業するまで青森を出るつもりもありません。よつて、エイジ君と一緒に東京に上京する予定は一切ございません」

……言い過ぎでしょうか？でも、これくらいでなければまた流されて東京行も決定されてしまいそうですし、まあ良いとしましょう。さて、もう涙目をしているエイジ君を説得するのは骨が折れそうです。ですが、一つ気合を入れて頑張りましょうか。

五ページ(後書き)

さて、キツキは東京へ行くのか行かないのか……迷ってます(笑)

六ページ

「ノオオオオオ！！僕と一緒に東京へ行くデスウ！！」

……涙を瞳に溜め、いつ泣き出すのかと思っていたら、これです。はあ……僕の婚約者様は静かに泣き寝入りするようなお優しいお方ではなかったのです。

「エイジ君、別に今生の別れではないのですから」

僕に覆いかぶさるようにしがみ付き泣くエイジ君へ、そっと背を撫ぜながら言い聞かせます。

「うつつうつつ……それでもだめえでえすう！！キツキはもう僕のデスー！！」

ああ、横目で窺えば大人たちは皆エイジ君を応援していて……まったく、僕にどうしろと？

「エイジ君、何も別れようとお話しているわけではないのですが……」

どんなに背を撫せても、優しい言葉を尽くしても、エイジ君にとっては東京行へのお返事が肯定でなくては何の意味もない……。

この場合、僕が折れるのはいつもの事です。なぜなら、僕は精神的に成人していて、エイジ君が夢に向かって楽しく進んでいるのも知っているから……不満も少しはありますが、応援しつつ、傍にいられるのはとても幸福なことだと思っています。

「はあ」

「……そうです。この世の中では、先に恋に落ちた方の負け……なのです。」

「分かりました。ええ、そうですね、僕が先にエイジ君へ恋をしたのですから」

僕がそう小声でささやけば、エイジ君は涙で濡れた可愛い顔を上げ、盛大に両腕を上げ大喜び……。

「それじゃあ、菊月ちゃんのご両親へもご挨拶しておかなくちゃねえ」

「よし、久しぶりに一張羅のスーツを出すかあ」

お母様は話しは決まったとばかりに立ち上がり、鼻歌を歌われながらお家に設置されているお電話の方向へ歩きだし。お父様は何だかホカホカしたお顔で二階にある自室へと向かわれました。

「……」

「あの、良いの？新妻君のご両親行っちゃったけど……」

僕は静かに部屋を照らす蛍光灯を見つめ、心を遠くへ飛ばし。エイジ君はいまだに小躍りをしていて、この空間に耐えられなくなったアフロさんは誰にもなく口を開きましたが、その問いに答える者はこの場にはいない、と誰か教えて差し上げて下さい。

などと、考えることを放棄して十数分。

「…………君、キツキさんと言ったかな？東京行の話は、良いのかい？…………本当に？」

ただこの場の成り行きを眺めていた口髭のおじ様が、ゆっくりとこちらを見つめ、ぽつりと問いかけられました。

「…………そう、ですね」

いい加減ぼうつと蛍光灯を見つめる行為にも疲れてきた僕も、ゆっくりと口髭のおじ様の方を向き、その瞳を見つめ真剣に答えます。

「きつと、僕がこの年で婚約者を得て、同棲をして将来を決めてしまうことに眉を寄せる方もこの先現れるでしょう。けれど…………僕は恋をしました。高校生で恋愛を経験する方は世界中に沢山いらっしゃるでしょうけれど、でもきつと、こんなにも人を愛すると言うことを、愛される幸せと言うものを実感している方はどこを探されても見つけられはしないでしょう。僕…………恋をして、エイジ君に染まって、深いところまで落ちて、幸せで、大好きで、愛おしくて仕方がないのです。これから先、どんなに困難なことが起きても、きつと僕はエイジ君を手放す気はありませんし、手放される気もありません。まあ、彼の可愛い我儘に振り回されるのも、惚れた弱みと言うものですから、この際ですし笑って許します」

そう、僕が真面目に問いへの答えを口にしていたその時、突然脈略もなくアフロさんは仰いました。

「君、やっぱり電話で話した子だ！！あの時も思ったけど、考え方とか話し方とか大人っぽいなあ」

アフロさんは一人うんうんと頷いていらつしゃいます。

「電話、と言いますと……ではあなたは服部雄二郎さんですか？」

東京行が決まった今、彼を無視するのも今後の関係に良くないよ
うな気もしますので以前名乗られたことを思い出し尋ねます。

「そうそう！！覚えててくれたんだ？気軽に雄二郎って名前で呼
んでいいからこれから宜しく」

……軽いですね。まあ良いですが。

「そうだったな、俺は週刊少年ジャックで編集長をしている佐々
木だ。東京へ行くのなら、服部と新妻君の橋渡しを頼む事もあるか
もしれん、よろしく頼む」

口髭のおじ様、もとい佐々木さんはそういうと佇まいを直し、軽
く頭を下げられました。

それを見た僕は、慌てて立っていたエイジ君の手を引っ張り、隣
に正座をさせて……

「はい、僕は匂坂菊月さきさか きくつきと申します。新妻エイジの婚約者で、今の
ところ高校を卒業と同時に入籍する予定で居りますので、どうか末
永くお付き合いのほどよろしくお願いいたします」

「お願いしますデス！！」

そう挨拶をし、アフロさんから発せられた「にゅ、入籍い?!」
という声を聞きながら、エイジ君と揃って頭を下げたのです。

六ページ（後書き）

楽しんでいただけたでしょうか？この先は、閑話を挟みつつ東京編になります。

閑話（前書き）

このお話は主にエイジ君の逆襲っぱいです（笑）引っ越し準備を進めるため、漫画禁止令を発令したキツキに反抗するエイジ君をお楽しみください。

閑話

「エイジ君……？何をなさっておられるのでしょうか」

……ところ変わりました、現在はエイジ君の自室へと舞い戻って参りました。何でも、都会の会社勤めをしていらっしやるお二人はお忙しいらしく、重要な話し合いや親御さんへの御挨拶は済んだので今後は電話でやり取りをすることを簡単に告げられ、慌ただしく飛行機で帰られました。

「ドツキーン！！デス！！」

兎にも角にも上京が決まった今は、何時引越しを、と指示されても良い様に特に物が多く苦戦を強いられるであろうエイジ君のお部屋から、こつこつと片づけを行おこなっております。そして、僕はこの片づけが終了するまではエイジ君に漫画を描いてはいけませんと禁止令を出したのです。なぜなら上京の時期について、現在が秋なので冬を越し、花が芽吹く春の方が縁起も良よいと大人の皆様が話中、エイジ君が早く行きたいと我儘を仰られた影響で……準備が整い次第向かうことに決まってしまったからなのです。

「エイジ君、もう一度お伺いしますが……何を、なさっておいでですか？」

ふつと微笑み問いかけた僕の顔を見て、エイジ君青褪め後ずさり
ます。

「ゴゴゴゴッゴメンナサイデスウ！！」

「こん、と頭を壁にぶつけて、もう後退りたくとも逃げ場のないことに気づかれた様子のエイジ君。」

「ウウウウウツッ！！ウガアデス！！」

「っな」

急に俯かれたかと思いきや、驚くほどの脚力で僕へと抱き着き……その体重を支えきれないまま倒れ込みます。

「っ……エイジ君。後頭部をぶつけました、とても痛いです。何よりもこのように遊んでいる時間はありませんよ？明日にでも学校へ挨拶に行かなくてはいいけませんし、友人や近所の方々、それに」

抱き着かれ、下敷きにされたまま、僕は冷静に言葉を紡ぎますが

「ほんとーに、イインデスカ？」

僕の首元に顔をうずめたエイジ君に、実は弱い耳元で問いかけられ

「ひうっ！……耳元で声を出すのは止めてください。それに、上京の件でしたら、今更です」

油断していた僕はびくり、と体を震わせてしまいました。ぱくつぱくつと早鐘の様に打つ心臓を落ち着かせて、やっと数秒後に低い声で抗議致しましたが、もう……遅かったようです。

「ふうー」

玩具を見つけた子供から、それを取り上げるのは至難の業なので
す。

「っ、えいじく、ひっ」

「ふうー」

叱ろうとして声を出せば調子に乗ってしまい、手が付けられませ
ん。ああ、どなたか、代わりにエイジ君を叱りつつ話し相手をしな
がら、このお部屋の片づけを請け負って下さる方はいらっしやらな
いでしょうか？

そしてエイジ君、僕にこのような真似をしたこと、必ず後悔して
頂きますから覚悟していてください？

閑話（後書き）

ああ、きつとエイジ君には、これが終わった後に何時間もお説教が待っているはず……（苦笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1811x/>

恋する僕（ぼく）と漫画狂

2011年11月29日01時47分発行